神戸新聞 2018年06月29日 金曜日 面名 発言1 14 14ページ

「はやぶさ2」

宇宙や生命の「謎」解明を

宇宙はどうしてできたのか。いのちはどこから生まれたか。人類の英知を結集してもいまだ解明されない謎を探るため、地球から約3億キロ離れた小惑星「りゅうぐう」の上空に探査機「はやぶさ2」が到達した。宇宙航空研究開発機構（JAXA）が2014年に打ち上げてから3年半の長旅だった。

りゅうぐうには、太陽系ができた46億年前の水や有機物が残っているとみられている。はやぶさは今後1年半にわたり、3回着陸しながら観測し、20年には帰還する予定だ。

画期的な成果を上げて、世界をリードする日本の小惑星研究をさらに進めてほしい。

今回、はやぶさ2にはさまざまなミッションが与えられた。最も重要なのは、りゅうぐうの表面に穴を開け、岩石を持ち帰ることだ。

惑星の表面は太陽光や放射線にさらされ、物質の性質が変化している可能性が高い。そこで変化が少ない地中の物質を採取するため、銅の玉を爆薬で打ち込む。

世界初の試みで、神戸大学を中心とするグループが装置開発や科学分析に携わる。来春には実験を始め、生命誕生や宇宙の謎に迫る成果を期待したい。

りゅうぐうは「そろばん玉」のような形をしていることが初めて分かった。さらに地図作りや表面の計測などがあり、一部は今年9～10月にもスタートする。多彩なメニューを組み込むことができたのは、日本の宇宙技術やロケット開発が着実に進歩している証しといえる。

製造には中小企業も数多く関わっており、ものづくりのレベルの高さも実証した。

思い起こすのは、03年に打ち上げられた先代の探査機「はやぶさ」だ。

エンジンや制御装置の故障など苦難を重ね、一時は行方不明にもなった。予定より3年遅れて帰還し、小惑星イトカワから持ち帰ったカプセルには、太陽系誕生の解明につながる試料が入っていた。

はやぶさ2は教訓を生かしてエンジンを強化し、観測装置も大幅に改良した。無事に任務を成し遂げて、日本の科学技術の進歩と宇宙開発に新たなページを開いてほしい。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

① この社説の筆者が、「はやぶさ2」に期待していることを70字以内でまとめましょう。

② この記事を読んだ感想を書きましょう。

名 前 【 】

NIEワークシート／中学校～高校／国語、総合、朝NIE